



日本文学全集
52

庄野潤三・小島信夫 三浦朱門



愛撫・プールサイド小景・相客・静物・鳥
裁判・アメリカン・スクール・疎林への道
セルロイドの塔・長すぎた青春・旧友・他

河出書房



目次

庄野潤三

愛撫……………セ

喪服……………二四

プールサイド小景……………三〇

相客……………四一

静物……………四九

櫛……………七五

鳥……………八〇

秋風と二人の男……………一〇五

小島 信夫

裁 判

アメリカン・スクール

疎林への道

三浦 朱門

セルロイドの塔

長すぎた青春

旧 友

注 釈
年 譜
解 説
卷頭写真

紅野 敏郎 三二五
上田三四二 三三二
榊原和夫 三四一

色
刷
挿
画

ブールサイド小
景人物秋風
と二人の男
裁判アメリカ
ン・スクール
セルロイドの塔

安西啓明
田中岑
藤松博

庄
野
潤
三

愛撫

秋築先生のことについて、ゆうべもあの人は私に聞こうとされた。

いったい、どういう風に話せば、満足するのかわから。この四、五日というものは、毎晩毎晩、同じ質問の繰返しばかり。どうして、飽きないのかと思う。またか、と思うと、うんざりして、すっかり興覚めした顔になるのに、それでもあの人は構わずに、執拗く執拗く尋ねようとされる。あたしが興覚めした顔をしているのはつきり分っているくせに、それでも無理矢理に、あたしにしゃべらせようとして、自分ひとり、ああ云えはどうだろう、こう聞けばどうだろう、とそれこそあの人の智慧のありつたけをしぼって、向って来るのだ。それは見えていて本当に痛々しいほど努力を傾けて居られる。滑稽なほど——とあたしは書くこうとして、痛々しいほどと書き直した。あたしにはもう笑う気持ちさえ起らない。それこそ一生懸命なのだ。何度あたしは思ったか知れない。あの人が、あれだけの熱情と粘り強さで物を書いたら、きつと素晴らしい迫力のある作品が生れているだろうに——。それも、あたしが毎日毎日、問われるままに、あの人に取って全く未知の事実を告白するのであれば、あの異常な熱心さも理解出来るのだけれど、あたしの答える事と云っては、最初の晩に云った事実より何一つ外には無いのだもの。次々と隠していた事が明るみに出てゆくのではなくて、最初からだであつたことで、それ以下でもそれ以上でもない。それはあの人だつて分っている筈なのだ。ちゃんと知っているのに、それを自分でわざわざ大変な苦勞をして、ああ云えはどう

だろう、こう聞けばどうだろう、とこわれたことの明瞭な玩具の自動車のセンマイを何度も巻いたり戻したりする子供のよう、に分けがない。

之までになつて、思い出して見れば、之と似た事がなかったわけではない。そして、執拗さにしても、或は今と同じくらいだったのかも知れないけど、ただその当時——結婚してあまり時間の経過してないその頃には、同じようにしつこい夫の態度にしても、平静を失っていたあたしには、強い愛情の表現と思つて済ますことが出来たのだらう。あたしは熱にうかされたような状態だった。あたしは——今から思うとすいぶん馬鹿だったと思うけど、あの人に夢中になっていた。

一日中、何も仕事を手につかずに、ぼーっとして自分で自分のしていることが分らない。ただもうあの人のまわりを夢遊病者のようにウロウロするしか能のないような私だった。女学生時代の、王子のように我儘で、ロビンフッドのように縦横無尽な（と自分で信じていた）

——そういうあたしは、もみくちゃにされて影も形もなくなっていた。それは、あつと云う間に大風が吹き込んで来て、眼の前にあつた一切のものを吹き飛ばしてしまつたような具合だった。結婚するまでのひろこは、あつと云う間に何処か遠くへ姿を隠してしまつた。

（ひろちゃんは、変つてしまつた。）

あたしの親しかったお友達は、驚きと怨みの氣持をこめて、あたし宛の手紙の中にそう書いた。あたしのお父さんもお母さんもそう仰言つた。あたし自身、それをハッキリ感じていた。

（昔のひろこは、何処へ行つたの？）

あたしはよく一人きりで自分の心に囁いた。しかし、そこにあるのは、昔のひろこと確かに違う、見覚えのない、大変心細い様子をしたら、永い永い熱病にかかったような、あたしだった。そして、そのあたしの前には、ただあの人の胸が見えるだけだった。あの人が笑えば笑い、あの人が不機嫌になれば悲しみ、あの人が眼の前にいると物が

言えなくなり、あの人が出掛けてしまおうと呆けたようになってしまふのだった。あたしの世界というのはあの人の、つまりあの人の外にはあたしは何も見ることが聞かぬことも出来ない状態にあった。何と云う哀れな、みすばらしい状態であつたのだらう。催眠術にかつた人間の見えるあの愚かな、緩慢な動作——それが結婚して後のあたしの姿だつた。そして、それは次第に弱まりながらも、三年後の今日までその水脈を曳いて来たように思う。

とも角、そんな風だつたから、あの人の病的なところに気が附かなかつたのだと思う。

結婚してから一と月ほど立つた頃に、私達二人は大山*へ登つた。三月の末で、頂上にはまだ少し雪が残つていた。スキーには時期が遅くて、私達の外には逗留の客は一人もいなかった。宿屋の主人の話では、昨夜来の強風で雪が一度に少なくなつてしまつた、もう三日ほど前に来られたら、もっと雪も沢山つもつてきれいでしたのに、と云うことだつた。実際、雪はザラザラして水分が多く、ほこりを被つたように薄黒くなつていた。その上に風で吹き飛ばされた杉の葉や小枝が、いっぱい雪の上に散り敷いていて、雪景色も美しくなかつた。

それでも私達は、宿屋のスキーを借りて、宿の裏を流れている河原へ出て滑つたり、林の間を辿つて山頂の方へ登攀を試みたりした。人気がない春の山上は、やはり私達に取つては心を楽しませてくれる自然のふところと云う感じだつた。殊にも大山神社から更に上に登つて、北壁と呼ばれる傾斜の下まで行つた時は、振り返ると真下に日本海が青くひろがって見え、何とも云えない爽やかな幸福感をあたしは味つたものだ。午後のスキーを終えて宿へ帰ると、すぐにお湯の沸いていることを知らせに来て、硝子窓越しに谷間の見える湯槽に飛びこんだ。

そんな孤独な自然の中の二人きりの生活の中で、或る晩、あの人はあたしを責め立てて、到頭女学校の頃のクラスエス——Tさんの話

をさせた。あたしは本当はTさんとのことは、あの人には話したくなかつた。結婚式の時にも招待したし、女学校を卒業する時に一番仲良しの友達であつたことだけは、それまでに話してあつた。だけど、どういふ風な径路で二人が親しくなり、どんな風な交渉があつたかと云うことまで、つまり女学校時代にだけ存在するあのクラスエスと呼ぶ特殊な同性間の愛情について、夫には話したくなかつた。知られたくないと云う気持の方がむしろ強かつた。それは特に秘密にしなければならぬ性質のものとは思わなければ、必要に迫られない限り、結婚してしまつた今日では夫にもまた他のどんな人にも云わないで、思い出として自分の心の抽出の中に封じこめて置きたかつたのだ。

ところがあの人は、ふとしたきつかけからTさんと交渉について一部始終をあたしの口からしゃべらせることに、異常な興味を持ち始めた。それはこんな風にして始まつた。

明日山を下るといふ日の夕方——その日は明日に疲れを残さないようにと云う用心から午後のスキーは早く切上げて宿に歸つた。そして風呂が沸くまでの間、部屋で炬燵に入つていた時だつた。あの人は昨日から書きかけていた「大山登攀歌」といふ詩を書き上げるのだと云つて、畳の上につつ伏しになつてノートに書いていた。あたしは武者小路の「美術を語る」といふ本を開いて読んでいたが、少し退屈して来て、その上にレターペーパーを取り出して、鉛筆で兎の絵をかいたり、意味のない文字を連ねたりした。あたしは昨日から「大山登攀歌」といふ詩が早く見たくて仕様がなかつた。それで、あの人がノートに向つてゐる間は、何をしてゐる気が落ち着かないのだった。麓の佐摩でバスを降りてから、幅広い真直な道路を二人列んで歩いた。道の両側はなだらかな傾斜の小松原がひろがり、真正面には白い雪をまだらに戴いた大山の嶺が聳え立っていた。太陽は南に傾いて、明るく日の光りが空にも野にもいっぱい溢れていた。そして振り返ると、遠く日本海が青く霞んで見えた。……その来しな風景をあたしは、いまだんな風な調べの詩につくられて行つてゐるのか、ずい分出来上るの

が待遠しかったのだ。

ところが、あの人は不意にノートを閉じて、ごろんと今度は仰向きに倒れるなり、（おい、こっちへ来い！）とあたしを呼んだ。（出来たの？）と、思わず声を立てて、炬燵から飛んで出るようにしてそばへ行くと、いきなりあの人はあたしの肩に手をかけて、横倒しにしようとした。胸の中へ抱き込まれながら、（出来たの？ 見せて）と云うと、あの人は（大山登攀歌なんて止めちまえ！ おい）と云って、いきなりあたしに接吻して来た。あたしは、うまく行かないのでイライラしたのだと、その時思った。しかし、永い接吻のあとで、あの人の口から出た最初の言葉は、意外にもあたしがあんなにその完成をたのしみにしていた詩のことではなかった。

（おい、ひろこ、お前Tさんに抱かれたことがあるだろ？）

あたしは、ハッと驚いた。日記を見られたな、とその時、あたしは感じた。あたしは女学校の四年の時から日記帳を全部持つて来ていた。そしてあの人に、（見たかったら、どこでも見ていい）と云ったことがある。その時あの人は、（人の日記見たって、仕様がないう）と云われた。あたしは自分の過去の何もかも一切をあの人の前に差出して、少しもやましくないという気持からそう言ったのだった。決して読んでほしいという気持はなかったけれど、読みたいという好奇心をあの人が抱くなら、何処を見られても構わなかった。恥しかったけれど。

あたしはTさんとのことも、すっかり日記の中に書いてあった。あたしはあの人の言葉を聞いた時、日記のその部分を読まれたなと思った。しかし、その直感は誤っていた。あの人は何も知らなかった。ただ不意にそのようにTさんのことを聞いただけだった。そして、それがあたしのTさんとの思い出の中でも一番秘密にしたかった場所に触れたのだった。

あたしはたった一度だけTさんに抱かれたことがある。修学旅行で東京の宿屋に泊った晩のことだ。あたしはそのことをあの人に話し

た。夜中に、同じ部屋のグループのお友達がみんな疲れて寝息を立てていた頃、どうしてか知らないけれど、ふっとあたしは目を覚ました。すると、あたしの隣りに眠っていたTさんも——みんな列べた夜具の中へ一緒に寝ていた——目を開けている気配が感じられた。（ひろちゃん！）低い抑殺したような声でTさんが呼んだ。（こっちへいらっしやい）あたしはその声を聞いた時、今までに一度も感じたことのない感情がビリビリと足のすみまでひろがるのを意識した。部屋は電燈をつけたままだった。あたしは、今目覚めているのが自分とTさんだけであること、その外のお友達は誰も熟睡していることをハッキリと感じていた。あたしの一方の側にはTさんと同じ間隔を置いて、あたしを好いているNさんが眠っていた。あたしはじっとしていた。すると、もう一度、Tさんの低い声が囁いた。（こっちへいらっしやい）あたしはその声を聞くと、魔法にかけられたように、身体をねじらしてTさんの方へ近寄ろうとした。そしてそれを待っていたようにTさんのパレエで鍛えた腕が伸びて来て、あたしの背中を抱いた。あたしは、何か非常にいけないことをしていると云う意識を烈しく心の中に抱きながら、Tさんの顔をよう見ないで、眼をつむったまま抱かれていた。Tさんは何も云わなかった。背中へ腕を廻しただけで、それ以上近くあたしを抱き寄せようとする気配で、黙ってじっとしていた。……Nさんが寝返りを打とうとする気配に、あたしはハッとしてTさんの胸から飛び退るように離れた。Nさんは気が附かない様子だった。あたしは胸が大きく波うつを感じた。心臓の鼓動がTさんにまで聞えるかも知れない。でも、Tさんは身じろぎ一つしなかった。あたしは、その時、Tさんにかすかな憎しみに似た気持を感じた。それから、しばらくの間、あたしは眠れなかった。次の朝、目を覚ましてから、あたしはTさんの顔もNさんの顔も他の親しいグループのお友達顔も、まともに見られないような気持がした。しかし、Tさんは平気な顔であたしに物を言った。まるで、ゆうべは何もしなかったかのように。あたしは、Tさんの男のような太い声を聞くと、

癪に障って仕方なかった。二人だけの秘密を作ってしまったこと、それをTさんが心の中で満足していて、表面ではさり気ない様子をしているのが、憎らしかつた。あたしが抱かれたまま、幸福に震える小兎のような姿態でいたことが、取返しのないことのような気がしてならなかった。しかし、事実、あの何秒かの間は、そうだったのだ。あたしはボーッとしていた。その時の気持がまざまざと思い出されて来るだけ、余計あたしは腹立たしく悲しくて、次の日は一日中、Tさんが何を話しかけても、ツンツンして少しも返事をして上げなかった。外のお友達が変に思うくらい。

あたしが話し終ると、あの人は、(そら、やっぱりおれの想像した通りだったじゃないか。きつと、そんな事があつたらうと、思つてたんだ)と言つて、まるであたしの結婚前の秘密の恋人を見つけたか何ぞのように、すっかり興奮してしまつた。そして、その修学旅行の夜のTさんの愛撫を、あたしの口からももつともつと詳しく描写させようとした。たとえば、Tさんが起す前にも眼を覚ましていたのは何故か、こつちへいらつしやいと言われた時お前の方からTさんの方へ抱かれに行つたのか、Tの方がお前の身体を抱き寄せたのか、どう云う姿勢で抱かれたか、二人の胸の間隔はどのくらいだったか、抱いている間にTはお前にキッスしなかったか、それとも背中や腕を撫ではしなかったか、二人の足は一度も接触しなかったか、更に二人は寝巻かピジャマかどちらを着ていたのか、二人の間隔が開いたとすればお前は強く(つまりもつと胸の中に)抱きしめられたいと云う欲望を感じなかったか、またTの方にそう云う衝動が現われなかったか、その間にTはお前の耳もとに愛撫の言葉を囁こうとしなかったか、またお前はその言葉を無意識のうちに期待してはいなかったか、仲のいい友達に抱かれていると云うよりむしろ男に抱かれていような錯覚を抱かなかったか、終つた後で平気であるTを憎らしく思つたと云うのは本当の気持か、その折に感じた肉体的な(つまり純然たる感覚の上での)興奮はどんな感じのものであつたか、次の日一日口をきかなか

たと云うがしかし結局は逆に以前より或る意味でもっと親密になつただらう、その修学旅行の後に時々Tがお前の家へ泊りに来たことがあつたと云うけれどもその時に同じような事が起らなかったか……まあ挙げてみれば大体こういう風な質問を続け様にして来るのだった。あたしはその晩のことを云つてしまつた後で、云わなきあよかつた、とすぐに後悔した。こんなにしつこく大騒ぎして、間い糺そうとするあの人の気持があたしには分らなかつた。嫉妬、だらうか。たつた一度だけ、何でもないほんのちよつとのことなのに、どうしてそんなに気になるのだらう。こんな場合に嫉妬する気持が起きるのか知らず。本當いとうとそう云う困惑した感情を自分で考へてみる余裕を与えないほどあの人の質問は次から次へと繰返されて、あたしを休ませなかつた。そして、Tさんがあたしの肩に手をかけただけで強く抱きしめなかつたと云う点なんか、幾度あたしが云つてもなかなか納得しなくて、そんな筈はないと云つてきかないのだった。あたしはしまいに耐えられなくなつて、(もういや、これ以上何にも云わなない!)と云つて、あの人から顔を背向けてしまつた。

そうすると、最後にあの人が言つた言葉はこうだった。

(お前は蛇が交尾しているところを見たことがあるか。おれにはある。中学生の時分だった。勤労作業といふものが始まりかけた頃で、郊外にある畑へ行つて開墾をやらされた時だった。あれは三月頃だったかな。休憩時間に、誰かが、草の中で蛇が交尾しているのを見つけて、騒ぎ出した。おれはこの時、始めて見た。そして、それが最後だった。早春の野原の草の中で、だあれも知らないところに、二匹の蛇が寝ているんだ。長い一本の縄のように。蛇の交尾というのは、お互いのしっぽに近いところにある吸盤のような部分を交叉して、頭は夫反対の方向にながながと横わっているのだ。それは交尾という言葉から受ける感じ——つまり動物の雌雄二匹が生殖の欲望から衝突し営むところの烈しい行為——そういう風なものから非常に遠いものだった。二匹の蛇は人間たちに発見され騒ぎ出された後も、なお少しもそ

の姿勢を変えなかった。それは静かな営みであった。静かなと云うのは、いかにも二匹の蛇がその行為に成功し、その欲望を充足せしめ、そして一つの雰囲気形成してその中に浸っていることを物語る静けさであった。それは驚いたことには、烈しい動作を伴うものよりも、かえって言い知れぬ生命的な感じを、見る者に与えずには置かなかった。だれも知らない野原の草の中で、彼等はたのしんでいたのだ。

そのながながと、お互いを信頼し切った風に横わった姿勢は、いかにも愛情のこまやかなものであり、見つけた中学生の心に嫉妬に似た感情を起させた。(こん畜生！ 昼間からたんのうしてやがる！) 一人の生徒が大声でどなつて、皆を笑わせた。そして棒片を探して来た生徒によって、一對の蛇はその交叉している部分を持ち上げられ、歓声の中に空中高くほうり上げられた。それから後はおれはもう見なかった。そんなにいじめなくてもいいのと思ったからだ。可哀そうに、乱暴な中学生の手にかかつて、何の罪もない相愛の二匹の蛇は、人間の残酷性の犠牲となつてしまつた。ところで、このたつた一度だけ見た蛇の交尾は、おれの頭の中に奇妙に感覚的な印象を残したが、きょうお前の話を聞いた時——つまりTがお前の肩に手をかけたまま、抱きしめもしないで、じつとしていたところを聞いて、おれはその時の蛇の姿勢を思い出した)

あんな屈辱を、あたしは知らない。あたしはあの人の胸から飛び退いて、ふとんの上になつて伏しになつて、泣いた。あんなに口惜しいことはなかった。あの人は驚いてそばへ寄つて来て、謝つた。(ごめんよ、ごめんよ。そんなつもりで云つたんじゃないんだ。勘忍してくれ。冗談に言つたんだ。そんなに怒るなよ) でも、あたしは、物を言う気もしなかった。そして、お湯が沸いたことを知らせに来たのをしおに、一人でサッサと部屋を飛び出した。きれいなお湯の中に身体をすっかりつけて、窓の外を見たら、夕方の光りが向うの谷間の稜線の林の上に落ちて、美しかった。それを眺めていたら、林の間からゴム長靴を穿いた十歳位の女の子とその弟らしい子が二人姿を現わして、

雪の傾斜を降りて来た。そして河原へ出て来て、あたしの視界を斜めに横切つて、流れの上にかかれた木の上を小走りに渡つて、やがてこちらの岸へ消えていった。その姉弟の姿が見えなくなると、耐えていた泪がまた急に湧いて来て、ポロポロと頬を伝つて落ちた。

秋築先生のところへ初めて行つたのは、あたしが女学校の四年生の三学期の初めだった。そんな年齢になつてからヴァイオリンを習うのは、確かに遅過ぎた。でも、あたしはヴァイオリンの名手になろうと云うつもりは、少しもなかったのだ。ただ、不意にヴァイオリンを奏けるようになりたいと思ひ出すと、矢も楯もたまらなくなつたと云うだけに過ぎない。今頃から習うのは遅い———い、何が遅いのだらう。自分が一番したいことをするのに、遅いもへつたくれもあるものか。あたしのグループのNさん(前に修学旅行の時のことを書いた時にちよつと出て来た人)がピアノを習いに行つてたのが、秋築先生の奥さんで、Nさんから紹介して貰つて、一緒に先生のお家へ習いに出掛けるようになった。学校が終ると、Nさんはあたしの家へ寄つてくれ、あたしはヴァイオリンのケースを持って、そうして二人で歩いて行つた。先生のお家へ着くと、Nさんは二階の奥さんのピアノのある部屋へ行き、あたしは階下の秋築先生のお部屋へ通つた。そして一時間ばかりして稽古が済むと、先に終つた方が一方の部屋へ行つて稽古の終るのを待つて一緒に帰るのだった。

秋築先生のところへヴァイオリンを習いに来ていたのは、その頃、あたしの外に商大の学生が三人きりだった。後になつてあたしと同じ女学校の下級生の人が二人習いに来るようになったが、最初行つた当時は、女の生徒はあたし一人だったので、そういう関係もあつて先生は特別にあたしを可愛がつて教えて下さつた。

先生は東京の音楽学校を出られてから、どこへも勤めないで、ただ気儘に自分ひとりでヴァイオリンを奏いて来たと言ふ人だった。奥さんの方がピアノを教えるようになってから、自分も生活の爲めと

云うよりは慰めのためについ前の年から教授を始めたのだった。お家に資産があるので、のんびりと暮して来られたのだった。そして人柄にも、そういう環境から来る鷹揚さが感じられた。四十を少し過ぎたばかりで、奥さんとの間には子供がなかった。奥さんはきりりと整った顔をした美しい容貌の人で、先生の方は勝負らしい奥さんにくらべると、いかにも中年の坊ちゃんと言う感じがあった。上品で柔和なつくりの顔をしていた。指なんか女の人のようにスラリと伸びていて、その指が先生は大分御自慢のようだった。

稽古は週に二回、水曜日と土曜日に習いに行った。外の商大の学生の人と一緒にする時もあったけれど、大休時間を定めてあって、かち合わないようにしてあった。外の人が稽古しているところへ行った時は、部屋の中で椅子に腰かけて、稽古を見ていた。三人の商大生の中で、一人素晴らしく上手な人がいた。みんな、あたしと違って、かなり以前からやっている人ばかりだった。

秋築先生は、あたしの稽古に対しては非常に自由だった。と云うのは、あたしがあまり練習をして来ていなくてとちってばかりいても怒らないし、今日は稽古したくないと云うとアツサリ止めて雑談をしたりすると云う風に、生徒のあたしの我儘をそのまま許してくれる有難い先生であつた。教わる曲も、従って正式のコースを順序立てて進むということがなかった。あたしはこれから生涯ヴァイオリンの道に進もうと云う決意は少しも持っていなかったし、一日も早く難曲を奏きこなすようになりたいと云う欲望も持たなかったで、先生の甘やかし過ぎる教授があたしには気楽で居心地よくしてくれたのである。稽古を終ったNさんが呼びに来られる時に、ヴァイオリンをケースにしまっておいて、先生と外のおしゃべりをしている日が多かった。しかし、あたしが熱心な時には、後から来た商大の人をいくらでも待たせておいて、時間にお構いなしに氣に入るまで稽古をやって下さることもよくあった。あたしは始めのうちは本當いとうとサボリたくなる時もあったけれども、(そして、実際サボって映画を見に行ったりしたこ

ともあったが)半年もするうちに、週に二回のお稽古の日が待ち遠しくらいになった。ヴァイオリンに対してはあたしはやはり氣まぐれであつたけれど、秋築先生のお家へ稽古に行くことは、いつの間にかあたしの大きな楽しみとなっていた。

先生はあたしを大変可愛がって下さって、あたしのお家へも時々遊びにお見えになり、ゆつくり話しこんで、家族と一緒に夕御飯を上って帰られることもあった。クリスマスには、あたしの好きな本を買ってくれたり、お誕生日には立派なケーキを届けてくれたりした。そう云う風なことに特別こまかく氣のつく人で、気持は女学生のようなところがあった。あたしは男の人であまりそんな風な贈物に氣を使う人と云うのは本當はあまり好きじゃない。でも秋築先生の場合は、向うがずっと年上でお父さんみたいなものだったし、その好意はあたしには自然に受取れた。そして、贈物を貰うと、やっぱりうれしかった。だから、先生のお誕生日には、今度はあたしの方から素晴らしいケーキをこさえて、チョコレートで先生のイニシアルを画いたのを持って行ったりした。奥さんもあたしを可愛がって下さった。

あたしは五年を卒業して、高等科一年に進んだが、その間に戦争は急速に烈しくなつて来て、あれは十九年の十月だった。とうとう秋築先生に徵用^{*}が来て、あたしはヴァイオリンの稽古をやめなければならなくなつた。坊ちゃん育ちの、働いたことのない先生は、以前から軍隊と工場とを恐怖して居られた。全く軍服を着た秋築先生はどう考えても空想出来なかったし、作業服を着た秋築先生もおかしかった。しかし、先生はこの調子では何日かは、応召が徵用か、どちらかが先にやって来るだろうと考えられて、大変神経を病んで居られた。実際にF造船所へ徵用される通知を受取った時は、先生は真青な顔色になつたそうだった。あたしのお家へ飛んで来られてそのことを話した時も、少し震えて居られたようだった。知合の関係から手を伸ばして、何とか行かずに済むように運動をせられたようだが、それも令状が来てしまった後では遅かった。

今でもあたしははっきりと覚えてゐる。十月の二十二日・土曜日の、最後のレッスンがあったのは。その時、習っていたのは、アヴェ・マリアだった。それはあたしの一番好きな曲だった。あたしは最後のレッスンに、アヴェ・マリアを奏けることがうれしかった。いよいよ先生にヴァイオリンを教わるのが最後と決った日から、あたしはこの最後のレッスンのために、今までにかつてなかった熱心さでこの曲を練習した。そしてこの日に、せめて自分で満足できるくらい立派に奏いてみせようと思つたのだ。その日は気持ちよく晴れ渡つた空気の澄み切つた秋の午後だった。あたしはこれまで稽古に行く時に着ていた服の中で、あたしが一番好きで、そして先生もあたしによく似合うと云つて居られた、アンゴラ地の紺色の、胸のところにひだのついたワンピースを着て行つた。そして髪に白い小さなリボンをつけた。

先生の部屋へ通ると、あたしはアツと思つた。窓際の日のさし込むテーブルの上に、紅と白のコスモス*の花が、大きな花瓶に溢れるように活けてあつた。まるで部屋の中いっばいにコスモスが咲いているような感じだった。それはあたしの一番好きな花だった。そのことをこれまで先生に話したことがあつたのだ。コスモスの花——それも、野原に咲き乱れているのとそっくり同じように、思い切り沢山、勢いよく活けてあるのが好きだと云うことを。あたしは部屋へ入つたとたんに、パツとコスモスの花のかたまりが眼に飛び込んで来て、そしてもう胸がつまりそうになるのを感じた。

先生はニコニコしてあたしを迎えた。あたしは来る途々ひとりりて考えていたことを、もう一度心の中で繰返した。

(いつものお稽古の時のように、平静に、そして出来るだけ立派に、アヴェ・マリアを奏こう)と。

あたしはコスモスを見ただけで胸がいっぱいになった自分を戒めて、冷静にならなければいけないと思つた。

稽古が始められた。あたしはアヴェ・マリアを奏き出した。ところ

が、どうしたことだろう。あんなに練習して来たのに、そして昨日は完全に奏けるようになっていたのに、最初からつまずいてばかりなのだ。いけない、いけない、と心で自分を叱りながら、あたしは一生懸命になって奏いた。だけど、あたしの指はまるであたしの指でないみたいに、糸を押え損つてばかりいるのだった。先生は、あたしが間違える度に、あたしの指を持ち直して下さつた。(ゆっくり、奏いてごらん)と云われた。あたしはとうとうしまいまで奏き終らないで、ヴァイオリンを下してしまつた。(もう、止めます)と、あたしは云つた。先生はすぐに自分のヴァイオリンをしまつて、(今日は最後だから、稽古は止めて、話をしましょう)と云われた。

あたし達は椅子に坐つて向合つた。先生の顔はあたしと同じように悲し気に沈んでいた。アヴェ・マリアをうまく奏けなかつたと云う事が、あたしの気持ちを一層切ないものにした。(冷静に、冷静に)と努めて来たあたしの心が、いつの間にかその囁きを失つてしまつていた。あたしは椅子に、先生と向合つて坐つてから、加速度的に気持ちが感傷に融かされてゆくのを自分でもはつきり感じていた。先生はこんなことを、しんみりした口調で話された。(今まで自分があなたの稽古を厳格にやらないで来たことを済まなく思う。こんなことになる下分ていたら、もっとちゃんと教えるべきであつた。どうか許して下さい)

あたしは部屋の隅にある洋服ダンスを見ていた。すると、眼の中に涙が湧いて来て、洋服ダンスがボーツと霞んでしまふのだった。

(あなたは非常に筋がいい。あたしは最初からあなたに期待をかけていた。きつと伸びるんだと思つていた)

窓からさしこむやわらかな日ざしが、コスモスの花の上に降りそそいでいた。それを見てみると、またコスモスの花が一かたまりにボーツと霞んで来るのだった。優しい、いい先生だった。もう習うことが出来ない。

(工場へ行ってからも、日曜日には家へ帰れる。習いに来ませんか。

話しただけでもいいから)

あたしはかぶりを振った。

(これから先、外の先生に習いますか)

あたしはまたかぶりを振った。洋服ダンスを見る。洋服ダンスは霞んでしまう。

(私が微用から戻るまで、待っていてくれますか) あたしはうなずく。(何年でも待っていてくれますか) あたしは二度うなずいた。頬を伝って、泪がスーッと落ちてゆくを感じた。あたしは立ち上った。

(先生、もう帰ります)

その時、丁度、二階から階段を下りて来る足音がして、(ひろこさん、まだ?)とNさんがドアの外から声をかけてくれた。(今、行くわ)(玄関で待ってるわ) Nさんは行ってしまった。あたしと先生とは向い合ったまま、部屋の中中に立っていた。先生はあたしの顔をじっと見ていた。あたしは胸が苦しくて、これ以上一分と此の場に立っていることは出来ないと思った。(さよなら)と云って、お辞儀をしようとする、(待つて)と先生が止めた。あたしは先生の顔を見た。先生の眼も泪でうるんでいた。そして、何か云おうとして、口ごもりかけた。

(先生)とあたしは云った。(いつものレッスンの時のように、お別れしたい。また来週来るみたいに――)

先生はあたしの言葉を聞くと、手を出された。(最後ですな。握手しましょう) あたしはスッと手を出した。先生はその手を握った。あつたかい手だった。あたしは次の瞬間、先生の手を振り離すように出して、クルリと後ろを向くと、ドアを開けて廊下へ出て行った。廊下へ出ると、急いでハンケチを出して、眼をふいた。玄関で待っているNさんに泪を見られたくなかった。帰り途、あたしは何処を歩いているのか分らなかった。Nさんが話しかける言葉に返事をしていたけれど、自分では何をしゃべっているのか、ちっとも覚えていなかった。

明るいう午後の電車道を、あたし達は腕を組み合って帰って行った。

恋というものを、あたしはついに知らずに少女時代を過した。あたしはスタンレー探險記*を読んで感激して、自分も探險家になることを本気で考えた。ボルネオの密林深く一人で入って行きたい、あらゆる猛獣を見、これらとたたかい、或は生捕りにして、その中のあるものは自分の勇敢で忠実な従者にしたいと思った。またロビンフッドの物語を愛読して、シャーウッドの緑の森陰を馬に乗って疾駆する自分を空想するのだった。どうして女になんか生れたのだろう。何故ロビンフッドに自分は生れなかったのだろう。そうかと思うと、今度はビーターパン*があたしの心をすっかり占領するのだ。夜、あたしの部屋で眠る時、今夜こそあたしはビーターパンになってこの窓から空へ向って飛び出すに違いない。そして眠りに静まっている暗い町の屋根屋根をはるかに高く、海賊フックの待っている場所へ急ぐだろう。あたしは永遠に少女のままできて、そしていつでも行きたいと思う場所へ飛んで行くのだ。それがあたしのこの世に生きている一番の誇りでありよるこびだった。

そんな風なあたしには、恋はなくてもよかったのだ。恋をすることを考える隙間が心の中に見つからなかった。だいいち、あたしは自分のことより外に考えなかった。あたしの前に立ち、あたしの心をとりにする男の人のことを、どうして夢み、待つ必要があっただろう。

あたしは、自分の世界を設計し装飾することはいっぱいだった。

秋築先生とのことだって、あたしは何とも思っていないかった。Nさんが、いつか、あたしに、(ひろこさん、先生が好きなんでしょう?)と云ったことがあった。その時あたしはあんまり大きな声で笑ったので、Nさんはびびくりしてしまったほどだった。あたしは無論秋築先生を嫌いはなかった。でもNさんの聞いたような好きさという感じは、あたしはちっとも持っていないかったし、だいいちそんなこと考えてみたこともなかった。Nさんは、(先生もひろこさん、猛烈に好い

てられるわ」と云ったので、あたしはこう云ったのを覚えてゐる。(でも、おかしいじゃないの。あんなおじいさんなのは——) 秋築先生がひろこを好いて可愛がって下さるお気持はあたしにはよく分っていたけど、そしてあたしは嬉しかったけれど、でもNさんがそんなことあたしに聞くことが、何か滑稽な間違ひのようだった。

最後のレッスンの時、あたしは胸がいっぱいになって、折角一生懸命練習して来たアヴェ・マリアは最初からとちつてばかりで、だんだんしどろもどろになって、終いには悲しくて悲しくて耐らなくなつて、泪がこぼれてしまつた。あの日のひろこは、たしかに滅茶苦茶に感傷的になつてゐた。ひよつとしたら、先生が好きだったのかも知れない。でも、あたしは、ただもう秋築先生にヴァイオリンが習えなくないと云うことだけで、胸が苦しくなつて来て、とても悲しかったのだ。先生が好きだから、先生とお別れしなければならぬから、それで泣いたのではない。先生に会おうと思えば、日曜日にはお家へ帰れるのだから、会いに行くことも出来たし、稽古だってその時にして頂こうと思えば先生は喜んで下さつただろう。あたしは、今までのような風楽しくレッスンへ来るのがブツツリ断たれてしまつて、もう永久に出来なくなつたと考えただけで、取返しつかないような氣持がしたのだ。

秋築先生が徴用に行かれてから、戦争は一日と激しくなり、敵機の空襲もその回数がようやく多くなつて来た。年が明けて昭和二十年を迎えると、B 29の本格的な爆撃があたし達の住んでゐる大阪を見舞うようになった。三月、あたし達の家族はついに四國の父母の郷里へ疎開することになった。秋築先生はそれまで、日曜日に三回ばかりあたしの家を訪ねて来られたことがあつた。何だかすっかり元氣をなくして居られて、以前の先生はあの陽のさし込む先生の洋間で、ヴァイオリンを抱いてニコニコしながら話をされる時の先生でないと、秋築先生らしくなかった。先生は造船所での毎日が自分の精神にも肉体

にも堪えられないと云うことを悲しそうに語られたが、あたしにはひどく残酷な感じだけがあつて、不思議に先生への同情の氣持というのが強く起らなかった。

四國の瀬戸内海に面した小さな町で終戦を迎えたあたし達は、その年の十月に大阪へ戻り、そして翌年二月にあたしは結婚した。秋築先生とは大阪を離れて以来、ずっとお目にかからなかつた。結婚して今の家へ来てからも、同じ大阪のしかも比較的近い距離に住みながら、一度も道で会つたりすることもなかつた。ただ結婚してからも時々思い出したように遊びに来てくれるNさんから、先生がお元氣でまたレッスンを始めて居られることを聞く位なものであつた。そして、(御主人が許してくれたら是非もう一度稽古にいらつしやい。いつでも喜んで歓迎しますから。もし週に何回と決つて通うことが出来なければ、暇のある時だけでいいから、氣の向いた時には、遊びがてらにいつでもいいからいらつしやい)と云う伝言をしてくれた。Nさんの話では、秋築先生は(結婚して奥さんになつたひろこさんは、どう考へてもその恰好が想像出来ない。やっぱりピンピンしている女学生のひろこさんしか浮んで来ない)と云つて居られたそう。

あたしはヴァイオリンを今も大事に持つていたが、もう一度秋築先生に習おうとは思つてゐなかつた。十九年の十月の最後のレッスン以来、あたしはヴァイオリンの糸を全部切つてしまつて、もう一生奏くまいと決心した。どうしてそんな氣持になつたのか、今から考へて見れば馬鹿らしい氣もしないことはないけれど、その時の氣持が今でもやはり分るようだった。夫は、糸のないひろこのヴァイオリンを見て、笑つた。(あたしは秋築先生のことは先に話してあつた) Nさんから先生のもう一度習いにいらつしやいと云う伝言を聞いても、あたしは習いに行こうと云う氣持が起らなかつた。それはあの糸を全部切つた時の決心にこだわるわけのものでも決つてなかつたが、ただ氣持が進まないと云う単純な理由からであつた。(ひろこのヴァイオリンはもうあの最後のレッスンで終る運命だったんだ) そう云う氣持だつ